

築地朝塾

[ニュース] 第一号

3年目もより熱く!!

充実の講師陣そろそろ 春塾(4期)スタートへ

毎回火曜日
4月11日
朝7時から

これからの日本を支える若者たちが本物の話を聞いて、多様性と専門性を身に付けた逞しい社会人に成長してもらおうと2015年スタートした「築地朝塾」。3年目に入り、いよいよ4月11日から第四期11回のセッションが始まります。これまで春秋合わせて3回の塾が開かれ、延べ1000人を超す塾生が参加し、それぞれにその道を究めた33人の講師陣から大きな感動と共感を覚えました。今回も元自民党幹事長の古賀誠氏、作家の澤地久枝さんなど政治、経済、社会、歴史、国際関係など幅広い分野の講師が、ここでしか聞けない貴重な話を精力的に語ってくれます。火曜日の築地の朝はどよほりも活発で、熱いのです。



4月11日にスタートする第四期もそれぞれの分野で活躍し、輝かしい経歴を持つ講師の皆さんが顔をそろえてくれました。皆さんは「築地朝塾」の趣旨を理解し、多忙な日程をさいてくださいます。毎週、築地に来て他ではまず聞けないお話を語りかけてくださいます。

破茂・前地方創生担当に続いての大物政治家の登場です。古賀元幹事長は2歳の時に第二次世界大戦に従軍中だった父がフィリピン・レイテ島で戦死し、女手一つで苦学する母親の姿を見て、小学5年生の時に「大きくなったら弱い人を助ける国の仕事をやろう」と誓い、政治家を志したそうです。テーマは「私の政治活動を振り返って」とっておきの素晴らしいお話をしてくださるでしょう。

続いて同月18日にはメガ証券の社長として政界経済を見てきた古賀信行野村證券会長が「これからの日本に必要なモノ」というテーマで語ってくださいます。中野問題の専門家の後藤康浩・亜細亜大学教授は同月25日に「隣国の大國中国とどうつきあうのか」と題して、鋭い視点で難問を解説してくださるでしょう。

連休明けの5月9日はインターネット日本導入の先駆者、鈴木幸一・インターネットイニシアティブ会長が、デジタル社会を軽妙に語り、16日には日本総合研究所調査部主席研究員深谷浩介氏が「アベノミクスの実態を細かく分析します」。

5月23日には「妻たちの二・二六事件」の著作で文壇デビューしている作家の澤地久枝さんが「瀬戸際の民主主義」というテーマで話してくれそうです。81年前の青年将校によるクーデター、二二六事件が軍部の独走を許し、日本を変えたことになりました。澤地さんは、今また民主主義が危うい状況に立ち至っていると現在の政治状況を憂い、その危機感を語ってくださいます。

数々の名建築を生み出し、世界的な建築家、伊東豊雄氏は30日に「建築で日本を変える」と題して講演します。TBSラジオレギュラーコメントーターで鋭い洞察力で知られる山縣裕一郎東洋経済新報社社長は6月6日に「メディアが直面する現状と課題」とのテーマでメディア論を展開してくださいます。

6月13日には16年春塾の講演で「政治家の見極め方」を熱心に話されました御厨貴・東京大名塾教授の登場です。題目は「天皇退位問題からこの国を問います」。同教授は天皇退位問題の座長代理として難題に取り組みされました。イラク人の父、日本人の母を持つハット研究所所長、川上おかりさんは6月20日に「ISを生んだ中東情勢」を特異な視点で話してくださいます。

30代の政治部で取材に明け暮れているころ良く聞いた言葉がある。「政界一寸先は闇だ。政治家はどこで地雷を踏むかも知れない、いつ飛んで来た矢が当たるかも知れないことを端的に言い表している。」

立花隆氏が著した「田中角栄研究」その金脈と人脈は鋭い矢となって田中の心臓を貫いた。メディアはテレビもラジオも日刊紙も週刊誌も月刊紙も同様に立ち、情報の確実さと速報に全勢力を総動員して調査と報道に取り組んだ。記者クラブにはキリリとした雰囲気があった。記者にとっても「一寸先は闇」だったからだ。抜かれれば記者生命は断たれ、飛ばされる。

間違った報道もそうだが、誤報は鋭い矢となって報じられた市民を突き刺す。生活を破壊し、当事者を死に追いやることさえある。情報は確証を得るまでは単なる噂話に過ぎない。「あつ、コロツケ飛んでる」。90

コロツケが相手にされなかった。その時代は「truth」が重視された。「source」は誰か、が問われた。だが、情報源の秘匿は大原則だ。スクープを取った事案では「私を信じて欲しい」と言うしかなく、緊張感を押しつ

記者の職責さえ放棄している。私は一度も「...とすることです」と言った、書いたことはない。いつの間にか放送原稿が「飛んでいるコロツケ」のようになった印象を受ける。

ポスト・トゥルース(Post truth)という英語を聞く。真実の後。つまり事実より個人の感情や情緒が優先されて世論が形成される状況。これをどうとらえるか。

「築地朝塾」の動機を煎じ詰めると「本物と偽物を見分ける人間力」を若い人たちに培って欲しい、その1点に行きつく。誰でも匿名で情報発信できるのがネット社会だ。EU離脱を争点にした英国国民投票ではネットを通じて偽情報が流

コロツケが飛ぶ時代

年代まで不確かな情報のことをそう言っていた。コロツケが飛ぶわけない。コロツケは食卓に乗ってこそコロツケだ。ところが大量のコロツケが飛び始めた。頻りに、日常的に。国境さえ越えて。

ぶされるような日々があった。忘れられない。近頃ニュースを聞いてみると「...とすることです」という言葉を頻りに耳にする。ひどい時は現場で現認しているのに「...とすることです」と

された(離脱推進派が投票後認めた)。先のアメリカ大統領選挙戦では偽情報報は国境を越えて流された(ローマ法王がトランプを支持etc)。

また、トランプ政権がメディア攻撃に正面切って使う「fake news」という乱暴な言葉には「これは21世紀の現実か」と耳と目を疑う。政権に都合な真実を「fake news」と譲らない。民主主義の危機を覚える。

海外ではかなりの機関がニュースについてファクトチェックを展開している。日本にも情報の確かさ信頼度をたぐり寄せる機関が必要なのではないか。

私は自分のジャーナリストとしての経験に立って信じているが、旧メディアから距離を置く層が確実に増

えている。自分と関わりのある情報か、関心を持つ情報だけを熱心に取りに行く。あとはご勝手にという世相だ。貧富の差だけではない。情報の格差が民主主義を危うくしている。

新しい挑戦へのベダルを踏み続けるには信念だけでは十分でない。何時の世も志ある同志の人材が必要だ。「築地朝塾」もそうだ。一人一人が面倒なことを嫌ってはいけない。面倒なことには挑戦して乗り越えて行く人と集団は尊い。疑問を持ったら、関心を持ったら360度思考を巡らせて欲しい。居心地よのままにまどろんでいっていると民主主義が遠ざかって行ってしまうので怖い。

(築地朝塾塾長 平本和生)

築地朝塾「2017年秋塾」(HPで募集開始をお知らせします)

一般社団法人 築地朝塾について

朝塾の運営を行う築地朝塾は2015年8月に一般社団法人(非営利)として設立されました。塾長・平本和生の「日本を支える若い人を育てる」という思いを実現するために、趣旨に賛同した方々と運営されています。すべてボランティアです。

組織は理事会(代表理事・金子秀明、常務理事・藤島淳、監事・国谷和夫、理事・事務局長・阿部峰子)を中心にして、事務担当、広報、運営などを16名の参加メンバーが分担しています。また、会場となるアクア社ショールームは、アクア社の協力によりご提供いただき、最新の機器類が備えられた素晴らしいプレゼンテーションルームを活用しています。

講師の方々も趣旨に賛同、ご多忙の中の貴重な早朝の時間を割いて、熱弁をふるい、最新の情報をご提供いただき、強いメッセージを伝えて下さいます。

● 築地朝塾「秋塾」募集概要	
募集塾生	50名
参加資格	20代~40代の意欲ある学生~社会人
受講料	33,000円

- 築地朝塾 規約
- 1. 築地朝塾の会場は6時50分にオープンします。遅刻した場合、入室をお断りする場合がありますので、ご注意ください。
- 2. 会場内では飲食ができません。朝食の持ち込みはご遠慮ください。
- 3. 限られた時間ですので、進行については司会者にご協力ください。
- 4. 講座内容の公表はお断りします。
- 5. 当日のご連絡は、asa-info@tsukiji-asajuku.jp宛でのメールで受け付けます。必要があれば折り返し、ご登録いただいている携帯電話に連絡します。
- 6. 欠席される場合は、事前に必ずご連絡をお願いします。FAX: 03-3264-0880 Email: asa-info@tsukiji-asajuku.jp

● 塾舎
「株式会社 アクア」ショールーム
〒104-0045 中央区築地 2-11-26
築地 MKビル1階



2016年秋塾講演要旨

オバマ大統領の広島訪問とその意味・トランプ勝利の背景との関連も

秋葉忠利氏前広島市長

(11月22日)



私には核について世界の世論を変えようという大きな目的がある。

今、米国は変わりつつある。キーワードとしてリンカーンが第1回目の就任演説の最後に使った「The Better Angels of Our Nature」(内なる声、良心、神の声を挙げたい。米国の言論界ではよく使われている言葉だ。

オバマ米大統領は2016年、広島を訪問した。歴史的な一日だ。米国の社会は重要な預木(くびき)、枷(かせ)から解放されて変わる。だが、日本ではオバマ大統領の広島訪問から何を学べるか、という議論が全くない。

米社会の基本にあるのはパールハーバーと原爆だ。パールハーバーは絶対悪で、原爆は善。投下が戦争を早く終わらせ、世界が良くなったという論理だ。1945年秋の世論調査では85〜90%が原爆投下は正しかった、という中で、10%に満たないが、広島・長崎があればひどい状況なのに全然責任を感じないでいいのか、という疑問を持つ人たちの内なる声、真実の声があった。「The Better Angels of Our Nature」と言えるが、表に出せない。オバマ大統領の広島訪問で、疑問を持つ人たちの心の中に、表に出しては言えな



オバマ大統領を直接招待

いまでも、「どうか」という反応になった。私は2010年にホワイトハウスで直接オバマ大統領に「広島に来てほしい」と招待した。米国では広島に行くことは謝罪と同じだから行くという、声が大きかったが、その時から彼が来るという事は既定の事実だった。被爆者たちの役割も大きい。被爆者のメッセージは長い間

「和解」という姿勢で、広島の実相を理解してもらって一緒に動いてもらうことを働きかけてきた。それが何人も大統領にメッセージが伝わり、最終的にオバマ大統領がそれに応えて広島に来た。

く。総括するとリーダーの役割は、最終的には「The Better Angels of Our Nature」を引き出すことが大事で、その意味では偉大な大統領だ。さて、次期大統領のトランプ氏は何を引き出したか。白人至上主義で、黒人・女性の侮辱、スワステイカ(かぎ十字)が米国内のあちこちで表れているし、イスラム教徒も襲撃され、ヘイトクライム、暴力的対立が出ている。米社会がリベラルかどうかは単純に語れない。一時は明白に理想を追う姿が米社会にあったが、最近はその考え方が拮抗している。その大きな理由が所得格差だ。

しかし、もう一度米国の社会を見直すと、60年代、70年代に比べて非常にリベラルになってきている。異民族や日本人に対する差別も無くなってきている。60年代から始まった貧しい子供たちには早急に学校に連れてきて朝ご飯を食べさせるプログラムなど子どもの権利を認める動きもある。経済格差のない社会を作ろうという動きも出ている。米国の多くの人たちの心の中で変化している。原爆投下は正しかったという考えが減っているのは、人類が平和になっけてきているという傾向を示していると言えよう。

秋葉 忠利 (あきば・ただとし) 前広島市長 1942年東京都荒川区生まれ。66年東京大理学部卒。70年、マサチューセッツ工科大学で数学の博士号取得、ニューヨーク州立大学講師。タフズ大数学助教授、准教授を経て広島修道大文学部教授などを歴任。90年から衆議院議員(3期)、99年-2011年 広島市長16年(3期)、11年-13年 広島大特任教授。10年にはアジアのノーベル平和賞といわれるマグサイサイ賞を受賞。主な著書に「報復ではなく和解をいま、ヒロシマから世界へ」など。

2017年春塾 講師紹介 (敬称略)



「私の政治活動を振り返って」

4月11日

古賀 誠 (こが・まこと) 元自民党幹事長

1940年、福岡県生まれ。1965年日大商学部卒。2歳の時に父がフィリピン・レイテ島で戦死し、母親が苦勞する姿を見て、小学5年生の時に政治家を志す。1979年の総選挙で旧福岡3区から初出馬したが、4,500票差で次点。1980年の総選挙でトップ当選する。以後、衆議院議員連続10期を果たし、1996年に橋本内閣で運輸大臣として初入閣。自民党国会対策委員長、自民党幹事長、自民党選挙対策委員長、宏池会会長、日本遺族会会長などを歴任し、2012年に政界を引退した。



「これからの日本に必要なモノ」

4月18日

古賀 信行 (こが・のぶゆき) 野村証券会長

1950年、福岡県生まれ。74年、東京大法学部卒、野村証券入社。総合企画室長、事業法人一部長、人事部長などを経て、95年取締役人事厚生担当兼人事部長。常務、副社長を歴任し、2001年野村ホールディングス取締役副社長兼COO就任。03年野村ホールディングス社長兼CEO、野村証券社長。11年6月から野村ホールディングス会長、野村証券会長、現在に至る。



「隣国の大国中国とどうつきあうのか」

4月25日

後藤 康浩 (ごとう・やすひろ) 亜細亜大都市創造学部教授

1958年生まれ。早稲田大政経学部卒。豪邦ド大学経営大学院修了(MBA取得)。1984年日本経済新聞社入社、国際部、中東、ロンドン、北京などの駐在を経て、論説委員、アジア部長、編集委員などを歴任。テレビ東京系「未来世紀ジパング」をはじめテレビ、ラジオ番組でも活躍する。著書に「アジア力〜成長する国と発展の軸が変わる」「資源・食糧・エネルギーが変える世界」「ネクスト・アジア〜成長フロンティアは常に動く」など。



「序章から次へ、インターネットが変える社会」

5月9日

鈴木 幸一 (すずき・こういち) インターネットイニシアティブ会長

1946年、神奈川県生まれ。71年早稲田大工学部卒。72年日本能率協会入社。インダストリアル・エンジニアリング、新規事業開発などを担当。82年同社退社。翌年日本アプライドリサーチ研究所代表取締役就任。92年12月、インターネットイニシアティブを創立、取締役、社長を経て、2013年会長兼CEOに就任。現在に至る。05年から毎春、実行委員長として東京・上野で音楽祭を主催。主な著書に「日本インターネット日記」(講談社刊)など。



「アベノミクスの空騒ぎと日本経済の実相」

5月16日

藻谷 浩介 (もたに・こうすけ) 日本総合研究所 主席研究員

1964年6月18日、山口県生まれ。88年東京大法学部卒。同年、日本開発銀行(現日本政策投資銀行)入社。同行在職中の92年に米国NY市 コロンビア大学経営大学院留学、同大学院(ビジネススクール)卒、経営学修士(MBA)取得。2012年日本総合研究所主席研究員、日本政策投資銀行特任顧問現在に至る。(公財)LABO国際交流センター理事など兼務。著書に「里山資本主義」(角川Oneテーマ21)、「実測! ニッポンの地域力」(日本経済新聞出版社)など。



「瀬戸際の民主主義」

5月23日

澤地 久枝 (さわち・ひさえ) 作家

1930年、東京生まれ。幼くして家族で満州に渡り終戦を迎える。1年の難民生活に苦しんだ後帰国。49年中央公論入社。経理部に籍を置きながら早稲田大第二文学部を卒業。婦人公論編集部、63年編集次長で退社。72年、デビュー作「妻たちの二・二六事件」でいきなり大宅壮一ノンフィクション候補に。以後、「密約」など数々の大作を執筆。78年「火はわが胸中にあり」で日本ノンフィクション賞、79年「昭和史のおんな」で文藝春秋読者賞、86年「滄海も眠れ」「記録 ミッドウエー海戦」で菊池寛賞を受賞している。



「建築で日本を変える」

5月30日

伊東 豊雄 (いとう・とよお) 建築家

1941年生まれ。東京工科大学建築学科卒。菊竹清訓設計事務所を経て71年独立。アーバンロボット(現伊藤豊雄建築設計事務所)を設立。主な作品に「せんだいメディアテーク」、「みんなの森 ぎふメディアコスモス」、「台中国家歌劇院(台湾)」など。ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞、王立英国建築家協会(RIBA) ロイヤルゴールドメダル、プリツカー建築賞、日本建築学会賞大賞などを受賞。主な著書に「建築で日本を変える」(集英社新書)など。

「メディアが直面する現状と課題」

6月6日

山縣 裕一郎 (やまがた・ゆういちろう) 東洋経済新報社社長

1957年、東京都生まれ。79年慶應義塾大経済学部卒、東洋経済新報社入社(編集部)。90年から2年間米国コロロンビア大学大学院(ジャーナリズムスクール)に留学。月刊「ベンチャークラブ」編集長、「週刊東洋経済」編集長などを経て、2006年取締役第一編集局長兼WEB事業室長。常務取締役編集局長、常務取締役マーケティング局長を歴任、12年社長に就任し現在に至る。



「天皇退位問題からこの国を問い直す」

6月13日

御厨 貴 (みくりやたかし) 東京大学名誉教授

1951年生まれ。東京大学法学部卒。東京都立大学教授。ハーバード大学客員研究員、東京大学先端科学技術研究センター教授、放送大学教授などを歴任。専門は政治学、日本政治史。「政策の総合と権力」(東京大学出版会)、「オーラル・ヒストリー」(中公新書)、「知の格闘」(ちくま新書)、「政治の眼力」(文春新書)、「権力の館を歩く」(ちくま文庫)など著書多数。



「ISを生んだ中東情勢」

6月20日

アビール・アル・サマリイ (日本名: 川上かおり) ニわかみ所長 ハット研究所 所長

1966年、イラク・バグダッド生まれ。父はイラク人で初のイラク国費留学生。母は日本人。88年バグダッドのテクノロジー大コンピューターサイエンス学部卒、NCRバグダッド支店入社。91年に来日し、日本NCR、ナスダック・ジャパン「マネジャー」などを歴任。その後、日本のイラク復興・人道支援関係者向けに「イラク方言講座」を開催。2007年アラブ・イスラム諸国言語文化専門シンクタンク「ハット研究所」を設立、17年株式会社 and world 設立。



「出版業界のこれからの姿」

6月27日

堀内 丸恵 (ほりうち・まるえ) 集英社社長

1951年、山梨県生まれ。75年成蹊大学法学部卒。集英社入社。第3編集部配属少年ジャンプ編集担当。76年、小林よしのり「東大一直線」と秋本治(当時のペンネームは山止たつひこ)の「こちら葛飾区亀有公園前派出所」を初代担当編集者として連載開始させ、ヒットさせる。少年ジャンプ副編集長、スーパージャンプ編集長、人事部人事課 課長、社長室副次長、第4編集部部長などを経て2005年取締役。常務取締役、専務取締役を歴任し、11年代表取締役社長に就任。

2016年秋塾の講演から

出口 治明氏
ライフネット生命保険社長

無敵の50代に
なるために、
いまやるべきこと

(9月6日)



人間が生きていく意味は「世界がどうすれば良くなるか」を考
えることで、そのためには、自
分がこういう風にやりたい、ど
こを変えたい、その中で自分は
何を担うのか——といういわ
ば「世界経営計画」のサブス
テムをはっきりさせる必要が
ある。世界の人はどう考えた
か、昔はどう動いたか、など「タ
テ、ヨコ」思考をすれば、自分
のポジションも見えてくる。

テーマに従えば、人生の中で
選択肢を増やすことだ。そのた
めに、「人、本、旅」が大切と考
えている。多くの人に会い、た
くさん本を読み、見聞を広げる
ために旅に出る——の3つが、
人生を変えていく。年齢に関
係なく、楽しい人生を送るた
めに、好きなことの勉強に投資
することが一番大切だ。

石破 茂氏
前地方創生担当相

人口減少に向き合い
地方創生で
次の時代の日本を
つくる

(9月13日)

私はもともと政治家になる
気は全然なかったが、田中角栄
さんに勧められ、29歳で国会議
員になった。議員になる1年前



に渡辺美智男さんが講演で「政
治家の仕事はたった一つ、勇気
と真心を持って、真実を語る。
これしかない」と言っていた。

真実を見つけるのはそんな
に容易ではない。真実を見つ
て勇気を持って語るだけだっ
たら、学者や官僚がやるのだ
が、政治家の大事なのは、
真心を持ってそれを語るとい
うことだ。清水幾太郎さんがあ
るエッセーで「国民が決して喜
ばないことでも、国家のために
どうしても必要なことがある。
それを説いて、理解してもら
い、実行することが政治家の仕
事だ」と書いていた。

私はこの自由で豊かな日本
を次の世代に伝えたいと思
っている。次の時代の日本のた
めに何をやるか、みんなで真剣
に考えた時、この国に必ず未来
はある。そう思っていて、あとしば
らく政治家をやらせてもら
いたい。

外山 滋比古氏 英文学者、文学
博士、評論家、エッセイスト

生活の中の思考

(9月20日)



今、世界的に大変化が起り
つつある。人工知能(AI)が
発達し、我々の生活全般を変
えなければならぬ事態が起
る可能性がある。アメリカ

の一部の人たちは数年前から
2045年問題として備えて
いるのに、日本では考えている
人はゼロに近い。

第一次産業革命後の学校教
育は「人間」を考えてこなか
った。知識をうまく教えれば
いいという思想で、生徒や子
どもの生活を軽視してきた。一
番大事なのは「生活」だ。生き
る予定をたて、いかにして健康
に賢く生きるかの具体案をつ
くることが大切だ。

そのほか大事なのは「失敗」
の経験。失敗を恐れず、進化
していけば、年をとってから考
えが大きく豊かになる。生きる
力を、考える力、成長する力な
どの力をいくらかでも持つに
は、ほかの人と話をし、会話を
する。存分に自分の思ったこと
を言い合うのがいい。「快適に生
きる力」、「面白いことを考える
思考力」を是非、身につけて欲
しい。

松井 秀文氏
元アフラック会長、NPO法人コー
ルドリボン・ネットワーク理事長

経営で大切にしたいこと

(9月27日)



私が経営の基本にした考え
方は「不易流行」と「相利共生」
の二つ。他社が未だ出していない、
時代に合った商品とサービ
スを開発する。これから先の変
化を考えて業界初というもの
を追求した。
経営情報をオープンにし、経
営者として何を考えているか、
ということに常に伝えた。若手

の提案活動を奨励し、自由闊達
とスピードを重視し、社員が自
由にものを言える風土を作る
ことも大事にした。
トップは言行一致が大切。不
一致で職員はついていけない。
それから、方針をきちんと示す
ということがものすごく大切で、
言う時は自信を持って言った。

岸井 成格氏
毎日新聞特別編集委員

日本の政治、そして
メディアを考える

(10月4日)



今、日本の報道の自由が「危
機だ」とまでは断言しないが、
このまま放っておくと、自分の
首を絞めて窒息しかねない。大
きいのは、高市早苗総務相が国
会で「偏向報道が改善されない
場合は、その放送局の電波を止め
ることは可能」と発言したこと
だ。

高市総務相がやり玉にあげ
た「ニュース23」で、私
は「安保法制」を批判的
な内容で40回取り上げ
た。安保法制は、あまり
にもごまかしやウソが
多すぎる。一番の問題
は、集団的自衛権だけで
はなく、法律の目的がア
メリカから要請があつ
たら自衛隊が世界中ど
こへでも行けるように
する点があることで、こ
うしたことを政府は正
確に説明しない。

先に成立した秘密保
護法もメディアを縛る。
自民党が企業に広告を

出させないようにすれば、メ
ディアは痛むと言ったり、テレ
ビ局の幹部を呼びつけ、さらに
「沖縄の新聞はつぶせ」と、声高
に公然と叫ぶなど、報道の自由
を侵す動きが出ている。「権力
は腐敗する」のであり、だから
こそ「権力を監視する」という
メディアの使命は重要になっ
ている。

大坪 文雄氏
パナソニック特別顧問

ものづくりを考える

(10月18日)



日本の商品が世界に浸透し
た背景には「消費者目線のもの
づくり」「イノベーション」と
「民生用の商品に先端技術をふ
んだんに投入したこと」があ
る。

2000年以上続く世界の
5600社のうち56%が日本
の企業。「社会的安定」、「本業の
重視」、「保守的経営」、「職人気
質を尊ぶ社会風土」、「信頼の経
営」、「共栄の思想」の六つが理
由と分析される。

失敗や痛い経験をしたら、
自らバリアをつくってしま
うが、組織の中で挑戦する新しい
力、職場の見えない壁を打ち破
って欲しい。

谷川 浩司氏 将棋棋士九段

常識外の一手

(10月25日)

普段は研究者、対局では序
盤・中盤は芸術家、終盤は勝負
師であり続けるというのが棋
士の顔だ。先の手を読むときに
は、まずそれまで得た情報、経
験、個性、流れを基に直感で1
割に絞る。読んだ手の結果が思
わしくないときには、考えてい
たことをすべて白紙に戻す。新
しい手や新しい構想が出てく
るかもしれない。

将棋の世界の常識も30年前
からほとんど変わっている。流
行や新しい感覚を基に新しい
発想で、その時代に対応してい
かなければならない。常識や本
筋が分からない人はプロにな
れない。常識の手しか指せない
人は一流にはなれないと思う。
予想できない事態に出くわし
た時、自分自身がこれまで培っ
てきた力を発揮する場だと思
い、積極的に前向きに捉えてい
くことが大事だ。

高原 耕三氏 真言行者

私の体験的信仰談

(11月1日)

「拝めば霊験はある」。財閥や
企業の創始者は、信仰による靈
験で成功したケースもある。そ
れは入り口で、その先に無限の
深さがある。拝むという行為の
中には、「懺悔、行願、廻向」が
入っており、すべての祈りには



自己の懺悔と他者の幸福を祈
ることもセットに入っている。
拝む対象は仏でも神でも同じ
で、神仏の先には自分自身があ
り、究極的には自分自身を祈っ
ていることになる。

高木 ゆかり氏 M/G Media
シニア・バイス・プレジデント

スポーツビジネス
の世界を生き抜く

(11月8日)

IMGはスポーツマーケティング
インテグレーションの会社
社で、選手の契約に関わる主な
業務のほか、試合のアレンジや
選手が素晴らしい環境でプレー
するためのコーチ陣づくり、チ
ームづくりなどの仕事を行っ
ている。

技術だけでなく選手が一番
いい状態でプレーするための
方法や、選手が自身でベストの

状態にもっていく方法などを
精神面からサポートする「メン
タルパフォーマンス・トレーニン
グ」は、アメリカではビジネスマン
も実践している。

岡本 行夫氏 元外務省北米第一
課長、元総理補佐官講演

トランプ政権下の
日米関係を読む

(11月15日)



トランプ氏が勝利したのは、
米国では我々が予想しないほ
ど、多くの不満票がたまってい
たということだろう。トランプ
の対外政策はどうなるか。経
済の方でいうと、TPPは死ん
だ。私は、日本がもう一度、自
由貿易の旗を振るべきで、アメ
リカを抜いてエフタープへ行
くことをやってみればよい。

安全保障面ではあまり心配
していないが、歴史問
題については、過去と
の清算が必要だ。日本
は、謝っていない。戦
時に日本はいろいろ
ひどいことをやっ
たが、それに対してきち
んと謝罪をしていな
い。和解というのは、
こちらの謝罪があっ
て、向こう側の赦し
があつて初めて成立する
概念だ。慰安婦たちが
生きていた間に謝罪し
て、赦しというものを
得ないと、いつまでた
っても日韓関係は安定
しない。

高木 ゆかりさん



「生」の話聞き、自分のものに

塾長 平本 和生

塾長の平本です。TBS時代には33年間報道局でテレビニュースの制作に携わり、報道局長を最後に経営側に移り、BS・TBS社長から2016年、会長職に就きました。

あるのは政治部の記者で、大きな原動力になってます。取材対象は非常に権力を持っており、それなりに頑固者、自分の力をプレゼンしたいという人ばかりです。すごい風圧と背景を抱えた人たちで、一人ひとり

が非常に自分の人生の血肉になったなど今更ながら思っています。その人たちと政治部で非常に近い形で付き合い合ってきたら、今日の私もなかったらと信じています。

田中派を担当しましたので、田中角栄、竹下登、二階堂進などのほか、今存命の野中広務先生まで非常に多くの政治家と、時にはお酒を飲んだりゴルフをしたりということも含め、家族のような付き合いをさせてもらいました。この国を支え、立つていくにはどういいう覚悟が必要かということ、日々、教えられたような気がします。次の世代、人材を育てていくにはどうしたらいいのか、ということもいつも仰っていました。

そこで考えたのが、「生」という思いに至りました。そこで考えたのが、「生」の人たちに会いその人たちの話を直に聞き、それぞれが自分で咀嚼して自分のものに仕上げていってほしいという事です。塾ですがテストもありませんし、クラス分けもありません。採点はそれぞれ自分です。自分流です。朝は大変です。自分を鍛えつつ、人からも影響を受ける。やはり「継続は力」と思います。

転がる石には苔が生えないと言います。自分が能動的に動くことが必要です。そのきっかけがどこにあるのかを、みなさんも日常の生活の中で探し続けていると思います。この学び舎がそのきっかけになると大変ありがたい、嬉しいと思っております。

私の願いは、個々の力をつけるのはもちろんですが、ここで学んだみんなが横のつながりを太くして、これからの人生を一人の力でなく、多くの仲間が力を寄せ合って生きてほしいという事です。

2016年8月30日
平本塾長のあいさつから



秋塾終了後に開かれた「夜塾」。時間を忘れて懇談を重ねました。



平本 和生
BS-TBS
取締役会長
(現職)

1969年 早稲田大学 政治経済学部卒業、東京放送に入社。テレビ本部報道局 テレビニュース部、政治部を経て、84年に外信部 ワシントン特派員。88年10月～90年3月まで「JNNニュースコープ」のメインキャスターを務める。その後、政治部長、報道局長、TBSビジョン社長、TBS常務・専務を歴任。2009年から14年6月までTBSホールディングス取締役兼BS-TBS社長を務めた。

アクア社

株式会社アクアは、年間5000案件以上の実績を誇る、総合広告制作会社です。CM絵コンテ・カンパ制作・イラスト制作事業から始まり、デジタルソリューションの世界へと幅を広げました。

今年、2016年に創業25周年を迎え、新規事業としてデジタルサイネージと、アクアの強みであるコンテンツ制作を組み合わせたソリューションビジネスを展開。

アクアショールームは、アイデアとデジタル技術を駆使して創造し続ける、アクアのクリエイティブをご覧いただける場所です。



発行元：一般社団法人 築地朝塾
〒102-0083 東京都千代田区麹町 1-8-1 半蔵門 MK ビル 1F FAX 03-3264-0880
お問い合わせはメールで！ asa-info@tsukiji-asajuku.jp
ホームページ http://www.tsukiji-asajuku
*本紙の全ての画像・文章は転載不可です。© 築地朝塾

成し遂げられた方の真の言葉は心に響く

2016年秋塾も無事終了し、11月25日には東京都千代田区の霞ヶ関ビル・東海クラブで「夜塾」が開かれました。受講生30人、OB運営委員15人が参加して懇談を重ねました。9月6日から始まった毎週火曜日、11回の充実した朝を満たした人たちが、それぞれの感想を述べてくれました。以下はその一端です。

【塾生からのメール】

Y・Tさん(番組制作会社勤務 50代)
参加前は昼の仕事に忙殺されていましたが、朝塾で素晴らしい話を伺い自分自身を客観的に見られるようになり仕事も早くなりました。火曜日の朝がいい時間になりました。

K・Tさん(放送局勤務 30代)
電車で朝6時台に朝塾へ行くことが自分にできるのかと、自信がありませんでした。でも、学べる、吸収できると思うと、朝塾で気持ちが変わるし、遅刻することなく通うことができました。仕事とは違う、自分自身について立ち止まって考える時間ができました。さらに異業種の方と会うことで自分の幅が広がりました。

M・Hさん(フリーアナウンサー 50代)
長いこと話すことを生業とし

てきた者として、何かを成し遂げられた方の真の言葉というのは、本当に心に響く、心を打つものだと改めて感じ、勉強させていただいた新鮮な3カ月間でした。

C・Tさん(美容師 20代)
正直「ちんぷんかんぷん」だったり、目が回るような日々でした。月曜にお酒を我慢したり、反対に飲んだりして、結構必死な時間の使い方をした3カ月でした。話の内容で理解できないところがいくつもありましたが、眼が血走る中話を聞き続けることがどれだけ大切なことか、よく分かりました。

R・Sさん(海運会社勤務 30代)
偉大な方ばかりのお話を聞き、感じたのは、雲の上の方だけど元は普通の人。若いころからの熱い思いと努力があって、今がある、ということを感じました。熱い思いと危機感を持って、仕事を頑張っていこう、と思っています。

R・Sさん(印刷会社勤務、50代)
私は退職しているのですが、いろいろな方のお話を聞いて自分で消化出来れば、まだまだこの年でもいろいろなことが出来る。競争ではなく、自分を磨くことが、年齢にかかわらず人間として必要なのだと感じました。

Y・Sさん(広告代理店勤務 40代)
視野が広がって世界が少しずつみえてきたように思います。広くなればなるほど、人間が大事で人間が全てと感じています。人間こそ、と思うので、このご縁を大切に頑張っていきたい。

K・Iさん(20代)
毎週席に着くと、まわりの人のエネルギー、熱意を感じ、講師の方の話も第一線で活躍する方々なので、普段にはない刺激的な経験をさせていただきました。今期勉強させていただきインプットさせていただいたことを、人生にどうやって生かしていけるかを考えていきたいです。

